

## 幕末維新・悲運の士 赤松小三郎

横松和平太

### 講演会「幕末の偉才、赤松小三郎」

一昨年夏のことだったが、講演会「幕末の異才 赤松小三郎」の案内チラシを手にしたことがあった。副題のコピーに「幕末に日本近代化のグランドデザインを描いた男」とあり、「暗殺された」との文言も気になり有料ではあったが受講してみることにした。赤松小三郎という名前も人もそれまで全く知らなかった。多くの方がそうであろうと思う。地元・上田市の人物伝では科学者の部で、洋式兵学者・議会政治の先唱者として紹介されているが、信州全体でみてもそう知られた人物ではないだろう。まさしく埋もれていた男である。

講演会の主催は、「上田高等学校校関東同窓会 赤松小三郎研究会」とあり、講師は佛教大学歴史学部教授の青山忠正先生であった。チラシには赤松小三郎のプロフィールが次のように紹介されていた。

天保二(1831)年～慶応三(1867)年

信州上田藩士。江戸に出て内田弥太郎、下曾根金三郎に師事し、数学、天文、測量、曆学、蘭学、砲術を習得。その後、勝海舟の侍として長崎海軍伝習所で英学、兵学、航海術を学ぶ。さらに横浜の英国士官アプリンから英語、英国兵法などを習う。幕末の京都に私塾を開き、洋式兵学を教えた。諸藩より学ぶ門下生の数、800余名。その中には東郷平八郎元帥、上村彦之丞大將など日清、日露戦争で活躍した諸将が何人か含まれる。薩摩藩島津久光侯の委嘱により「重訂 英国歩兵鍊法」を翻訳した。将来の政体構想と国家のグランドデザインを描き、慶応三年五月、前政事総裁職前福井藩主の松平春嶽侯と、島津久光侯とに建言した「建白七策」は、政治史の中で輝いている。天幕一和、諸藩一和のもと上下二局の議政局により、内憂外患のこの時期を乗り切る方策を模索し、最後まで東奔西走したが、明治維新直前の慶応三年九月、京都において暗殺された。享年三十七。上田に赤松小三郎記念館がある。

青山教授の講演では、①彼の生い立ちと修業時代、②『英国歩兵錬法』の翻訳刊行、③政体建言七条、④京都での薩摩による暗殺死、について史料の紹介も含め詳しく解説があった。それなりに彼の人物、業績、非業の死に至るまで理解が深められたのである。

今少し掘り下げて考えてみたいところもあったのだが、他の事やらで関心が薄れ、昨年夏には高野山への旅行中の発病騒ぎもあり、それに紛れ遠のいていた。昨年九月には信州上田へのバス旅行企画があり、担当としてプランニングに当たったが、訪問地である上田城跡には、赤松小三郎記念館があることを思い出し、見学先に組入れてみた。旅行当日は病後の体調もあり参加を自粛したのだが、参加された方から後日『赤松小三郎先生』の現代語訳版を渡され、縁を感じて頂くことにした。記念館の見学記念にと顕彰会の方より贈呈されたことであつた。

同書を読むことで、赤松小三郎の生涯が再び迫ってくるようであつた。思い起こされた私の関心事は、幕末の偉才とされる男が、何故暗殺されたのであろうか？ さらに、彼の業績とされる英国兵法書の翻訳、政体論の価値はどうであつたのか？ など、調べ確かめ考えてみたくなつたのである。

彼が暗殺されたのは、慶応三年九月三日のこと、翌月には「大政奉還」があり、さらにその翌十一月には、あの坂本龍馬が同じ京都で暗殺されている。龍馬との間には幾つかの共通項がある。例えば、二人の師匠はともに幕臣勝海舟であること。建言した政体論は小三郎の方が龍馬の「船中八策」より先であり、内容も似通つたところがあるとされる。また、暗殺の背後には薩摩藩の影が見えるとかである。龍馬と小三郎では、今日ではネームバリューに大きな差ができてしまっているが、何故なのか？ 等以下順次検討を重ねていきたい。

## 芦田(赤松)清次郎の修業時代

彼の生涯を考えるにあたって、幕末維新に活躍した人物達との位置関係を整理し理解の助けにしてみたい。

赤松は信州上田藩軽格の芦田家の次男に生まれた。天保二年(1831)の生まれである。ほぼ同年代の人物としては、一つ上に長州の吉田松蔭、三つ下に大分・中津藩の福沢諭吉、土佐の坂本龍馬は四つ下になる。いずれも下級武士の生まれだ。上田藩

の殿様は松平忠優、養蚕・製糸業の振興も考えた開国派、嘉永元年(1808)幕府老中に三十七才にして抜擢され海防掛となる。この年、数学好きで利発な藩校の秀才清次郎は十八歳で江戸に留学のチャンスをつかむ。

江戸で何を勉強したかと言えば、先ず幕臣で天文方の内田弥太郎塾に入門、数学・天文学・地理・蘭学などを学ぶ。次に、幕府講武所の砲術師範・下曾根金三郎に入門し西洋砲術・蘭学を学ぶ。一旦、芦田家から赤松家に養子に入る為上田に戻った後、安政元年(1854)、二十三にして再度江戸に出て、勝海舟の蘭学塾に入門。先進知識を学ぶには蘭学の習得が必須であった時代に、理系の技術者エリートとなる道をここまで順調に歩んだといえよう。龍馬が江戸での剣術修業や佐久間象山塾を経て海舟に入門する八年も前のことであった。

安政元年といえば、日米和親条約が結ばれ開国へと時代が大きく動き出した年である。勝海舟はといえば、蘭学・洋式兵学を習得し、信州松代藩の異才で西洋流砲術指南佐久間象山とも既に出会っていた。前年には幕府に対し艦隊・海軍の重要性を主張した海防に関する上書を提出し、この頃大目付・大久保一翁と知り合っていた。

翌安政二年(1855)から同六年(1859)までの足掛け五年間、赤松清次郎は師匠の勝海舟に従って長崎に滞在し、蘭学・英学・兵学・航海術の修業に励むことになる。薩摩など各地へ艦船での航海も体験している。海舟は大久保一翁の膝下で長崎海軍伝習所の開設、筆頭格として人材養成など幕府海軍の創設に働く。長崎の伝習所は閉鎖され、今度は江戸築地に軍艦操練所を開設することとなり、教授方頭取となる。江戸へは咸臨丸で帰ったが、清次郎も従者として同乗した。

江戸に戻った清次郎は、蘭学の限界に気付いたのか手塚律蔵(佐倉藩)の英語塾に入門する。時代は黒船来航前後より蘭学では世界に通用しないことが次第に明らかになってきていた。築地で蘭学塾を開いていた福沢諭吉が蘭学に見切りをつけ、英学の独習を始めたのも同じ安政六年であった。福沢の場合は、開港間もない横浜居留地に出かけたが、オランダ語が通用しない事が転向決意のキッカケだったという。時代背景にはヨーロッパにおけるオランダの没落があった。ナポレオンの登場により、1810年オランダは一時併合され国が消滅し、その後も政治的な混乱が続いていた。しかし幕府は、この辺りの事情に疎かった。鎖国政策下に長崎出島をオランダ交易と主な西洋情報の窓口としていたからであった。長崎商館長の江戸参府も嘉永三年

(1850)を最後に取りやめとなっていたし、阿蘭陀風説書などにより、アジアにおける西欧列強の動きはある程度知ってはいても限られたものであった。時代の覇者はいち早く産業の近代化に乗り出し成功していた大英帝国であった。西洋の先進的な知識や技術を学ぶ為には、蘭学から英学への転向はとても賢明な選択だった。

海舟の従者としての修業は、清次郎の次なる飛躍につながるかとも思えたのだが、そう上手くはいかなかった。大きなチャンスを出す事件に出会ってしまうのだ。咸臨丸による渡米一行の選に漏れたことである。師匠の勝海舟は、万延元年日米通商条約批准の為の使節団に選ばれ咸臨丸艦長として渡米を果たす。といっても航海中は船酔いでほとんど指揮が取れなかったというの有名なエピソードであるが、何故漏れたかといえば、幕臣ではなく陪臣という身分だったのが大きい。身分格差は確かにあったのだ。しかも開国派として活躍した主君の松平忠固(忠優から改名)が前年に四十八才の若さで亡くなっておりコネも効かなかった。咸臨丸の乗組員には同じく陪臣の福沢諭吉もいたが、彼は何奉行木村摂津守のコネで彼の従僕となってチャンスをつかんでいる。乗組員の一人には十才年下の幕臣で同姓の赤松大三郎がいた。彼も長崎海軍伝習所出身だった。この人は維新の後、海軍中将まで出世している。余談になるが、森鷗外の最初の妻はこの人の娘である。

咸臨丸で渡米というチャンスを得たか逃したかで、彼らの運命は大きく変わっていった。海外情報を生で体験できるかどうか、大きな違いを生んだのだ。清次郎はきつと悔しかったと思う。

失意の清次郎は、海舟の元を離れ故郷上田に戻り養父の死で赤松家を継ぐことになる。通称を翌年、小三郎と改めた。赤松大三郎のことが頭にあったのかどうか？ 大三郎に対抗しての改名だとは思いたくないところである。

## 洋式兵学者・赤松小三郎

師匠の勝海舟に江戸で再会したのは四年後の元治元年(1864)のことだった。海舟は軍艦奉行・勝安房守となり幕府海軍のリーダーとなっていた。この間に、海舟の元には土佐を脱藩した坂本龍馬が入門していた。龍馬は小三郎より二才年下だが、既に佐久間象山に入門するなど西洋砲術を学んでいた。海舟に入門してからは、海舟に従って航海術修業をし越前、長崎を訪れ、

また松平春嶽、横井小楠、西郷隆盛などと人脈を広げていた。神戸海軍操練所の発足に当り塾頭にもなっていた。

上田にいた小三郎は不遇の時代であった。山国では折角の航海術も役に立たなかったが、兵学が活きたのか藩の調練方御用掛を勤めている。財政難で混乱していた藩に、幕政改革意見書を出したりもしている。幕府の長州征伐に上田藩も動員され、従軍準備の為小三郎は江戸に出た。海舟に再会したのはこの時であったが、海舟と行動を共にはしなかった。翌年には軍事の為江戸、大坂、京都間を奔走することになるが、最新の軍事学習得の為には英語を更に学ぶ必要を感じていた。そこで薩英戦争や下関砲撃をした横浜駐屯の英国軍を訪ねる。駐屯軍士官・アフリンについて横浜に通いながら英文法、英国式兵法を本格的に習得した。

洋式兵学者としてのレベルを上げるべく、翌・慶応元年(1865)には、かつて砲術を学んだ下曾根塾に再入門。また横浜通いも続け、英国歩兵練法という書物の翻訳に取組む。この本はライフル銃による最初の歩兵操典とされる。翻訳作業は翌年三月には、下曾根塾の看板で朝津富之助(加賀藩)との共訳により全八冊刊行された。当時は武器の技術革新により戦闘法も一変していった時であり、この出版は大いに注目されたようである。

小三郎はこの出版で名を挙げ、翌年動乱の地京都に出て英国歩兵塾を開く。

この家塾は評判となり諸藩より入門者相次ぎ八百人余に及んだという。幕府も赤松に着目し開成所の教授登用の意向もあったという。しかしここでも小三郎は不運であった。上田藩は幕府からの要請を拒んだ。かれの出世を妬む狭量な人達からやっかまれたのだろう。この時、小三郎が開成所教授に出仕し幕臣に登用されていけば全く違う運命になっていたのかも知れない。この時もチャンス逃したのである。幕府は開国以来西洋化路線の政策を取り始め、人材養成強化のため蕃書調所は文久三年(1863)開成所と改称されていた。蕃書調所には諸藩の優秀な洋学者が教授陣に採用されていた。彼らの中には陪臣から幕臣に取立てられた者も多く出た。津和野藩の西周、美作津山藩の津田真道、長州藩の村田蔵六(大村益次郎)など後に明治政府で活躍する人材が集められ明治政府による近代化に活躍することになる。福沢諭吉もこの頃陪臣から幕臣に抜擢されている。見方によつては、幕府による維新近代化がありえたかも知れないという所以でもある。

赤松塾への入門者には薩摩藩の者が最も多かったという。薩摩藩はこの塾を薩摩藩に丸抱えすることにする。塾では洋式兵制・兵法の教授だけでなく、英国歩兵練法の改訂版の刊行を依頼。薩摩軍局から刊行した。この塾に学んだ門下生には、後に明治の陸海軍を率いた秀れた人材も多くいた。東郷平八郎・上村彦之丞・野津鎮雄、道貫・樺山資紀・篠原国幹達である。薩摩藩の兵制改革強化に重要な貢献をしたのであった。

西国雄藩は西洋流近代化にいち早く取組み始めていた。最大の雄藩・薩摩藩は文久三年(1863)の生麦事件を契機に勃発した薩英戦争以降は、英国式の知識や技術の導入に熱心となっていた。慶応元年(1865)には秘密裏に英国へ留学生を派遣している。慶応二年(1866)の赤松小三郎の招聘もその流れであった。自力で人材養成の後では小三郎の価値も下がり、もう用済みだったのかもしれない。

## 政治啓蒙家・赤松小三郎

若い時代から江戸に出て先進の知識や技術を学び、勝海舟などといった人達との交流からか、変革の潮流が押し寄せてきた時代の気分というものなのか、小三郎は単なる洋式兵学者、技術屋で留まろうとはしなかった。

海舟から別れ上田に戻り燻っていた不遇の時代から既に、己の政治的な見解を世に訴えるエネルギーにあふれていた。その最初は藩政改革の意見書提出であり世の中の情勢に無関心や家臣の無氣力を批判し、財政、教育、軍事政策の必要性を訴えた。しかし藩はこれを受け入れ無かった。軽格の身分故だけからかどうか内容が未熟だったからなのかは、よく分からないが。

次に持論を訴えたのは幕府に対してであった。慶応二年(1866)八月、第二次長州征伐やら將軍家茂から慶喜への交代などで混乱した時でもあり、内容はともかく小藩の軽格の意見は受け入れられなかった。しかし提言したことでの見識が認められ、開成所教授への登用というまたとないチャンスがあったのに逃したのは前に述べた通りである。ここでも運をつかめない男であつたのだ。

京都の家塾を開いてからは、兵制改革の必要性、英国式新兵法を教授しながら、西洋の科学や政治論までも講義したという。

この評判は塾生から各藩に広まり、福井越前藩の松平春嶽の耳に入るところとなり、慶応三年(1857)五月十七日、お抱えの薩摩藩・島津公にも同じ五月、「政体建白七策」なる意見書を提出した。

## 政体建白七力条

幕府や越前藩、薩摩藩に提言した建白書は、赤松小三郎記念館発行のパンフには議会政治をいち早く提唱した「新政府構想論」であると書かれていた。日本の現状を痛烈に批判し内憂外患を思い日本の進むべき道を洞察したグラントデザインで、これは坂本龍馬の「船中八策」より約一ヶ月早い。ことを強調している。

これを持つて、彼を顕彰する人達は、赤松小三郎は「近代日本を築いた先覚者」と胸を張っておられるのである。そこでこの建白策の内容につきもう少し具体的に見てみたい。本当に「いち早く」「独創的に」彼によって提唱されたものであるのかどうかである。

実際の建白書は約二千六百字からなる長文で具体的に詳細なものらしいが赤松小三郎記念館パンフの要約によれば次のようである。

- 一、 上下二局の議政局開設
- 二、 人材教育は大学小学校の設置
- 三、 国中の人民皆平等
- 四、 国中の貨幣統一
- 五、 国防の海陸軍兵備
- 六、 諸物製造局を諸所に造営
- 七、 牛羊鶏豚と肉の常食

確かに龍馬の「船中八策」といわれるものと比べて見れば、似たところが多い。

違うところといえば、人民皆平等、殖産、体力向上に向けた肉食の奨励といったところか。龍馬の提言は、勝海舟や大久保一

翁といった幕臣、また彼らの人脈から交際があった横井小楠(熊本藩)・由利公正といった人達の影響があったといわれる。赤松小三郎の建白書の越前藩への提出日より少し後、龍馬もまた越前藩を訪問しており、これを読んだ可能性もあるとの説もあるが証拠はない。また龍馬の策そのものにも後世の人による創作が入っているとの見方があるようで、こうした考え方は当時の先進的な人々の間では一般的になりつつあったものであるという。

赤松小三郎の遺品の中には、福沢諭吉の『西洋事情』がある。この本は、慶応二年(1866)年の十月から十二月にかけて初編が出されたものである。内容的には米国、欧州への彼の体験に基づいた知識や情報が詰まっている。政治・経済・教育から兵制、社会福祉事情まで情報が網羅されている。

小三郎の意見書に影響を与えたのは、まず勝海舟であり横浜で学んだ英国士官アプリンから得た海外情報と考えられるが、直近に読んだ諭吉の著書も大きかったと思われる。しかし悲しいかな小三郎には海舟や諭吉のような海外渡航体験がなかった。その差は決して無視できないだろう。世に先んじた独創的なものであったとする見方にはやや躊躇するところだ。確実に当時の先端を行っていた一人ではあるのだが。

逆に提言を受けた越前藩や薩摩藩はどう受けとめたかである。まず越前藩である。藩主・松平春嶽は開明的な人物として知られ、早くより藩政改革に乗り出し、熊本より横井小楠を招聘している。小楠には深い学識に裏打ちされた政治哲学や改革策の提言があり弟子の由利公正などをアドバイザーとして重用していた。小三郎の建白書を読んでは見たがそれ程目新しいものとは思えなかったのでは？ 横井小楠・由利公正の考えは大政奉還論や後の五箇条の御誓文へと繋がっているようだが、小三郎の考えは入っていたかどうかは分からない。

次に薩摩藩はどうであったかである。小三郎の考え方の前提には、国や民を守る為に天皇の下の団結を説き天幕一和、つまり公武合体を唱えていた。さらに幕府と薩摩の一体をも説いていたという。薩摩藩の参謀役の西郷隆盛、幕府の京都奉行・永井尚志、また会津藩にもこの考えを伝えていたという。幕府と会津と薩摩が連携していた時も一時はあったが、慶応三年の九月という時点では、薩長同盟による武力倒幕策へと方向転換していた。だから小三郎の建言は時勢を読めない外れのものであったろうし、邪魔なものであったと思われる。彼の得意の時期は短かったのである。



## 小三郎・龍馬の暗殺事件

大政奉還・公武合体路線を唱える小三郎も龍馬も薩摩藩にとっては邪魔な存在であった。小三郎については英国式兵学の教授も教本の翻訳も終え、その役割は終えたと判断されたであろう。それに薩摩藩に丸抱えされ内部に入り込み軍事機密を知りすぎて、スパイとさえ思われたのでは？ 折から小三郎には上田藩から再三にわたり召喚命令が出て止む無く帰国を決意させられた。薩摩藩からすれば、譜代の上田藩の帰趨もよく見えない中、機密保持のために生かして帰すのではなく、暗殺で始末してしまえ、となったようだ。或いは小三郎の才能を幕府側に使われることへの恐れという動機なのかも。暗殺直前には送別の宴を催すという小細工をろうしている。暗殺の実行犯は中村半次郎(後の桐野利秋)他だった。暗殺後には犯行を隠すために杜撰な追悼の墓碑まで建てるという隠蔽策を講じている。

しかし、真実は徐々にあかさされるようになり、約百年後のことであるが、昭和四十二年(1967)に桐野利秋の在京日記が発見され犯行が決定的となったのである。

同じく公武合体路線の人と見られたのか龍馬も小三郎の死の二月後の十一月、近江屋で暗殺されたのはよく知られたことである。しかし事件の真相は未だに解明されていない。龍馬の暗殺もまた、薩摩藩黒幕説が情況から有力と思えるのだ。

## 小三郎・龍馬其々の死後

明治維新の直前に非業の暗殺で倒れた二人であるが、明治以降の二人は大きく異なっている。薩長が天下をとってからしばらくは忘れられた存在でしか無かった。その龍馬に光をあてたのは『汗血千里駒』なる明治十六年(1883)、高知の土陽新聞の連載小説であった。これが単行本となりよく売れたという。今も世に喧伝される龍馬伝説のネタの多くはここにあるという。これが効を奏したのか明治二十四年(1891)に龍馬は正四位を贈られた。作者は坂崎紫瀾なる維新の主流派から落ちこぼれたジャーナリストで自由民権運動家、土佐の男であった。土佐人による龍馬の復権は田中光頭にさらに引継がれる。明治三十七年(1904)日露戦争を前に宮内大臣であった彼は昭憲皇太后の夢枕に龍馬が立ったという伝説を広める。

何と言っても龍馬の知名度を高め、人気を不動のものとしたのは、司馬遼太郎の『龍馬がゆく』(1962年より産経新聞に連載開始)であろうしこれを原作にしたテレビドラマであり映画の数々であった。

これに対し赤松小三郎はどうであったのか。当然のごとく薩長の天下で忘れられた存在であったその名を再び世に出したのは、山路愛山なるジャーナリストであり『上田の奇傑 赤松小三郎』を信濃毎日新聞に明治三十五年(1902)連載し、信州では知られるようになったらしい。明治三十九年には日露戦争の英雄であり、かつての弟子であった東郷平八郎以下の将軍が小三郎没後四十年ということの上田を訪れ、罪滅ぼしの為にか頭彰碑を建てた。大正十三年には従五位が贈られ復権を果たしたが、無論全国的には今でも無名に近い存在のままである。彼の顕彰会が2003年に、記念館は2012年の開設である。平成になったつい最近のことではない。

戦後の歴史小説等でも彼が題材となったものは少ない。井出孫六に『夜明け前の生贄 赤松小三郎の死』(1980)、最近では江宮隆之に『龍馬の影 悲劇の志士 赤松小三郎』(2010)がある位だろう。思うに、赤松小三郎は、見識や人脈を拓ける運をつかみ損ね、信州上田藩の出身というハンデを克服できなかったのか。残念なことに時流の動きを読み損ねたところがあったと思えてならない。(了)

その他の参考資料 ..

『赤松小三郎先生 現代語訳版』、『勝海舟と福沢諭吉』(安藤優一郎)、『西洋事情』(福沢諭吉)、

『横井小楠 その思想と行動』(三上一夫)、『勝海舟と坂本龍馬』(加来耕二)

「幕末の異才、赤松小三郎」(青山忠正)、他 Web資料多数。